

国立病院機構におけるクリティカル領域の ナースプラクティショナー（NP；診療看護師）育成

座長 矢野 尊啓[†] 山西 文子^{*}第64回国立病院総合医学会
(平成22年11月25日 於福岡)

IRYO Vol. 66 No. 3 (106-108) 2012

要旨

平成22年4月東京医療保健大学大学院看護学研究科において、国立病院機構との連携により診療看護師（nurse practitioner：NP）育成コースが開講され、新進気鋭の21名の大学院生が学んでいる。厚生労働省も、医師の包括的指示の下で特定の医行為を実施する特定看護師の調査試行事業について、同大学院を含む4施設を指定した。臨床現場での実習を含む2年間の課程終了後、クリティカル領域のNPが国立病院機構の病院で緊急度や重症度の高い患者に対する救命救急を含んだ診療行為の一部を担うことが期待されている。病院勤務医の負担が強いわが国では、正統的な看護観を持ち、看護師として患者の命の最も近くで医療を実践するNPにより、患者への的確で速やかな対応、医療の効率化が期待できる。クリティカル領域のNPには、症候別臨床推論能力、医療面接と身体診察能力、病態生理を論理的に理解したうえでの患者アプローチ、実践的知識に基づく状況の総合的判断が現場で即座に行えることが要求される。従来の看護師養成教育と異なり、医療現場での実習が多いため医師の指導による研修が大部分を占め、NP育成には医師の協力が欠かせない。指導者側も学生側も、スキルミックスによる看護師のステータスの向上、新たな一歩進んだチーム医療の実現を常に意識し、受け入れる社会、組織、従来からの看護師を含むすべての医療関係者は、NPの存在意義、職務内容を理解し、建設的に協力する必要がある。NPがわが国の社会に受け入れられ、正当に評価を受けながら医療に定着するためには、医療サービスを受ける国民の協力も必要不可欠であり、そのためには学生も指導者側も常に謙虚さを失わず、確実に少しずつ社会の理解を得ていく努力が肝要である。すべての職種が積極的に協働し新たなチーム医療を築いていけば、NPは看護を志す者にとって今後魅力的なキャリアパスになりうる。

キーワード 診療看護師、チーム医療、クリティカル領域、スキルミックス

平成22年4月から、東京医療保健大学大学院看護学研究科において、国立病院機構との連携により診

療看護師（nurse practitioner：NP）を育成する高度実践看護師コースが開講され、新進気鋭の21名の

国立病院機構東京医療センター 内科 *看護部 †医師
別刷請求先：矢野尊啓 国立病院機構東京医療センター 内科 〒152-8902 東京都目黒区東が丘2-5-1
(平成23年3月2日受付、平成23年12月9日受理)

National Hospital Organization Launching a New Joint Program for Raising Nurse Practitioners in Critical Medicine
Takahiro Yano, Fumiko Yamanishi, NHO Tokyo Medical Center

Key Words: nurse practitioner, team care, crucial care/medicine, work sharing/task shifting

大学院生が学んでいる。臨床現場での実習を含む2年間の所定の課程修了後、クリティカル領域の診療看護師が国立病院機構の病院で緊急度や重症度の高い患者に対する救命救急を含んだ診療行為の一部を担うことが期待されている。一方通常の看護師も毎年採用され、現場でこれまでどおりの業務に従事するため、NPが能力を発揮するフィールドである国立病院機構の病院の従来からの職員は、NPの存在意義、職務内容を理解し、NPを含むすべての職種が新たなチーム医療の形成に向けて積極的に協働していくことが必要となる。厚生労働省は、「チーム医療の推進に関する検討委員会」報告書を受けて、今年度は「チーム医療推進会議」を開催し、医師の包括的指示の下で特定の医行為を実施する「特定看護師」の調査試行事業について、すでに教育を開始している大学院4施設を指定した。このうち東京医療保健大学大学院では、国立病院機構東京医療センター、災害医療センターなどの医師の協力を得ながら、検討を重ね、わが国で初めてのクリティカル領域の大学院教育がまさに実施されているというわけである。

本シンポジウムにおいては、5名のNPと関連の深い方々から次々にプレゼンテーションをいただき、最後にフロアから質疑応答を受ける構成とした。まず名古屋医療センター整形外科齊藤 究氏が、国立病院機構の専修医留学制度を利用し、2カ月間の米国ロサンゼルス滞在中にNPと出会い、米国のNPに関するさまざまな側面を学んだことを詳細に紹介された。広い米国では、とくに人口の少ない郡部、いわゆる田舎においてNPは問診、診察から検査、処方に至るまで、医師と変わらない業務を遂行している。こうしたprimary care physician (PCP)の代役としてのNPの需要は、まったく医療事情の異なる本邦では低いと考えられるが、病院勤務医の負担が強く、とすれば疲弊しがちなわが国の現状においては、さまざまな専門分野、救急などのクリティカル領域で社会に貢献できる場があると思われる。

次の演者は、著者とともに東京医療センター教育研修部の中核をなす尾藤誠司氏であり、自身が東京医療保健大学臨床教授として教鞭をとり、実際に大学院生と接し、交わした会話、感じた能力、ポテンシャルから、わが国におけるNP育成のためのカリキュラムにおける重点項目を、具体的な能力目標competencyからみて取り上げた。すなわち、現在東京医療保健大学大学院で学んでいる21名は、いず

れも看護師として最低5年間の臨床経験を有しており、個々の患者に接した際には、自らの経験知を駆使し、その患者の重症度や緊急度などがある程度察知し、行動できる点で従来からの看護学校の学生とはかなり異なっている。学習に対するモチベーションもきわめて高い。しかし一方、基本的な医学知識に裏打ちされた評価、観察、(鑑別)診断、治療という一連の診療行為を引き起こす論理的思考の流れは学ばねばならぬ点が多い。クリティカル領域すなわち救急部門emergency room (ER)、急性期病棟、周術期管理を念頭に置いたNP育成をめざす場合、症候別臨床推論能力、医療面接と身体診察能力、病態生理を論理的に理解したうえでの患者アプローチが現場で即座に行えることが必要である。

3番目の演者は、長崎医療センター救命救急センターの高山隼人氏である。高山氏は、自らがかわる救命救急の分野における将来のNPのかかわりへ期待を述べた。現在わが国には21分野の認定看護師(CN)があり、CNの中でクリティカル領域は、救急看護、集中ケア、小児救急看護があり、すでに各施設の救命救急センターやICUにおける救急看護の質の向上に寄与している。救急医の立場からは、NPがトリアージやトリアージに必要な諸検査の施行、評価、呼吸管理、中心静脈カテーテル留置、皮膚切開縫合を協働して行い、NPは看護の視点からより専門的なケアを自立的に行っているポテンシャルを有している。とくにへき地離島や中小都市では、米国と同様医師不足が深刻で、NPがその役割をになって医療の質を維持・改善することも期待される。医師法のもとでは医師の指示のもとでの協働とならざるを得ないが、将来より自立したケアができることを期待して締めくくった。現在東京医療保健大学大学院で行われているクリティカル領域でのNP育成プログラムは、救命救急部門の医療の質の向上に十分寄与することが期待される。

4番目には現在東京医療保健大学看護大学院で学ぶ学生が2年の課程を修了後に受け入れる施設の看護部長として、名古屋医療センター看護部長川口悦子氏が、新しく誕生してくるNPに対する期待を具体的に述べた。クリティカル領域におけるNPは、救急患者、周術期患者、ハイリスク患者を対象に安心安全な医療を医師との協働のもとに適時に効果的に提供することが求められるが、そのためには実践的知識に基づく状況の総合的判断、それに対応した治療の実践が第1と述べた。また倫理的意思決定へ

のかかわり、医師以外の医療従事者との協働、チーム医療のリーダーとしての役割、さらに研究開発にも期待する。したがってスキルミックスにおいては救急患者のトリアージ、創傷処置、ショックの診断と初療、急変時の医療処置、高度な検査・処置手技など幅広いものが求められることになる。NPは看護師として患者のいのちの最も近くで以上のような質の高い医療を実践するため、患者への的確で速やかな対処、異常の早期発見、待ち時間減少による患者満足度の改善、医師の負担軽減による専門的診療効果の改善、病院の機能強化、医療の効率化が期待できる。なによりこれからNPをめざすものにとって、魅力的なキャリアパスになり、モチベーションを高める効果を持つことを期待したいと述べた。このためにも、周囲の職種が、NPの能力を正しく評価・理解し、ポジティブな相互作用に心がけることが肝要であろう。

最後のシンポジストは、大分地域で慢性期医療分野でのNP育成の先駆的な役割をにない、東京医療保健大学大学院でも看護学研究科長を務める草間朋子教授である。当大学院は急性期あるいはクリティカル分野での看護師の業務拡大、キャリアアップの機会拡大に先駆的に取り組もうとする意欲ある学生の受け皿であるが、修士課程はわずか2年間であり、そのカリキュラムの大部分は医療行為に関する基本から実践までの知識・技術を系統的に講義するため、カリキュラムの大部分は医師が担当する実戦的教育に費やされる。したがって従来からの看護教育を受けたものにとっては看護のマインドが失われてしまうのではないかという危惧や批判がある。しかし本邦におけるNPは、あくまでも正統的な看護観を持ち、生活モデルに従って医療介入を行う看護職である。従来のかかわりを越えて新たにNPとして巣立とうとしている看護師たちが社会に受け入れられ、正当に評価を受けながら定着するためには、看護師を含むすべての医療職、医療サービスを受ける側の国民の理解が必要不可欠となってくる。同じ職場の中で従来の看護師と新しいNPが、どのように共存し、

お互いの立場を尊重しつつ新しいチーム医療の1つの形を作って共栄していくかがなにより重要である。草間氏は、今後のチーム医療のなかで看護師、NPが協働して効果的・効率的な医療を提供するために、医療の原点ともいえる「人間」を正しく理解し、医療の人間的、人道的な側面を実践できるような看護師が育成できるような教育プログラムが切に望まれると述べた。

わが国で初のクリティカル領域のNP育成をめざし、東京医療保健大学は国立病院機構と協力して看護医療大学院を発足させ、平成22年4月より21名のモチベーション豊かな学生が2年間の研修を開始した。従来の看護師養成教育と異なり、医療現場での実習が多く含まれるカリキュラムのため、医師の指導による研修が大部分を占める。指導者側も学生側も、スキルミックスによる看護師のステータスの向上、新たな従来より一歩進んだチーム医療の実現を常に意識すべきである。受け入れる社会、組織、従来からの看護職員を含む医療関係者には、わが国の今後の医療のあるべき姿を考えたいうえで、NP育成の目的を十分理解し、建設的に協力していただく必要がある。新たな試みであり、一部に錯誤もあろうし、時間もかかるであろう。今回のシンポジウムの最後には、現在東京医療保健大学大学院で学んでいる3名の学生が、いずれも謙虚な気持ちでNPとして新しい形のチーム医療の一翼をになう強い意志を表明し、質疑応答を締めくくった。新しい職種NPがわが国の社会、医療に確実に根付くためには、学生も指導者側も常に謙虚さを失わず、確実に少しずつ関係各位の理解を得ていく努力が当面不可欠であろう。今後看護を志す者にとってNPの資格取得がひとつの将来性ある魅力的な選択肢となることを願っている。

〈本論文の要旨は第64回国立病院総合医学会シンポジウム「国立病院機構におけるクリティカル領域のナースプラクティショナー（NP：診療看護師育成）を座長としてまとめたものである。〉